

い。前述の「柱、油、梯子」の三語の語アクセント型が坂町と同一であることは、かつて坂町の語アクセント体系が熊野町のアクセント体系と同一であり、後に現状のように中くほみ型アクセントを成立させたということを考えさせてくれる。

第三節 表現の生活

あいさつ、感動などの表現

あいさつや感動などの表現は、その土地のことばでの決まりきった表現であるといふことができる。その表現のしかたに、特別な意味をもたせているのではなく、その表現をすることによって、土地人どうしのコミュニケーションが、スムーズに進められるといつてよいものである。

(ア) あいさつの表現

朝

○オハヨ ガンシタ。(お早うございます。)

「ガンス」は、現在では、八〇歳以上の人々でないと使用されない。これに答えて、

○オハヨ ガシタ ノー。(お早うございます。)

のように「ガス」の形が用いられていることもある。

中年層以上であると、

○オハヨ アリマシタ。(お早うございます。)

I 生活誌編

のようにいう。「ガンス」の場合でも、「アリマス」の場合でも、「タ」を用いず、現在形で表現している場合もあるが、「タ」を用いた表現法のほうが、よりていねいな物言いとされている。

昼

○コンチワ。(今日は。)

一般的な日中のあいさつである。

晩

田などの帰り道に、人に出会った時のあいさつは、

○ハー カエリマヒョー ヤー。(もう帰りましょうよ。)

のようにいう。夜分に人に会うと、

○コンバンワ。(今晚は。)

という。

訪問

人の家を訪問するときのあいさつで、現在でも老年層に用いられている言い方は、次のようにいう。

○オーガンサンシタ カ。(おあがりなさいましたか。)

これは、元来「食事はすみましたか」の意をもつもので、昼でも、夕刻でも用いられている。

老年層の人の話では、昭和一〇年ごろまでは、店に買物に入る場合に、

○オーガン。

といていたという。訪問時のあいさつことばが転用されたのであろうか。

中年層以上の人々は、店屋に入る時のあいさつに、

○クレンサイ。(下さい。)

といっている。これは、少年層で「チョーダイ。」といっているものに対応する言い方である。

辞去

○ホイジャー。(それでは。)

この言い方は、親しい間柄で、ごく一般的に用いられているものである。ていねいな物言いのあいさつとしては、
○ゴメンツカンヘー。(ごめん下さい。)

のようにいう。これは、老年層の女子に用いられることの多いあいさつと言えるようである。

謝辞

○アリガトー ガンス ノー。ヨイヨ。(ありがとうございますねえ。全く。)

これは、老年層の謝辞である。芸備地域の北部では、「タエガトー ガンス ノー。」が用いられているが、当地では用いられない。

重ね重ねの謝辞としては、次のような言い方をする。

○オーケニ アリガトー ガンス ノー。コリヤー マー ゴネンノ イリマシテ ノー。(おおきにありがとうございますねえ。これは、まあ、御念の入ったことですねえ。)

このように丁寧な謝辞は、老年層女子専用のものとなりつつあるといえそうである。

来客へのもてなし

○ダマクナ コトー シチヨリマスガ カケナサンヘー。(むさくるしいことをしていますが、掛けなさいませ。)

I 生活誌編

老男↓中男)

熊野町のあいさつことば、なかでも老人層のそれについて注目してみると、当町での老人層の敬語法の特徴があらわれている。「ガンス」「ナサンヘー」「ツカンヘー」「クレンサイ」「ンサンス」など、当町でも、他の一般的な表現においては用いられることの少なくなっている敬語法が多く認められる。

(イ) 感動の表現

① 驚きの表現

単独な驚きは、老年層では、次のようである。

○オリヨリヨ。 (あれあれ。 老男)

○アリヤ。 (あれ。 中女)

また、同意した気持は、

○ホー ヨ ホー ヨ。 (そうよそうよ。 老男)

のようである。これが、更に深い感動の心持をもって同意される場合には、「ホー ヨ ホー ヨ ホー ヨー。」のように表現される。

ところが、青年層では、

○ホー ヨノー。 (そうよねえ。)

のように変化しつつある。

考えこんだり、自らを励ましたりする時には、「サーリヤ」を用いる。

○サーリヤ ドーシヨーカ。 (さあどうしようか。 中男) ハひとりごと

「オリョ」「アリヤ」「サーリヤ」のいずれも、拗音で成立していることは注目されよう。感嘆の表現は、拗音が好まれるのが特徴といえようか。

また、その物事の状況が厳しいものであることを表現するのに、

○オー サブ ヤ、サブ ヤ。(おお寒、寒。 中男↓々)

のように「ヤ」文末詞を用いて表現する。

② 間投する表現

文表現の途中に、文表現の表現意図とは異なることが出現する。これを取りあげてみると、まず前述の「カー」が見られる。「備後バーバー安芸ガラス」という言いぐさに見られるように、安芸で物事を限定する表現をしたてる助詞「バックシ」というところを、備後南部では「バー」という。また、安芸では、文中に「カー」が間投されるというわけである。安芸でも都市部では、この「カー」が用いられることは、ほとんどなくなった。熊野町では、なお、中年層以上の人々に用いられている。

○ホイデ カーノ。ワキヤー ワカラン ヨーニ カー ナツテ シモーテカラニノ。カー コマツテ シモ
ーテ。(それで、ほれね。訳がわからないように、ほれ、なってしまったからね。ほれ、困ってしまった。 中女↓中男)

「カー」は「これ」に由来するものであろう。「本当に、全くもって」という心情を強く表わすとともに、聞き手の注意を発話者のほうに向けさせるものとなっている。

代名詞の「アンタ」も間投されることが多いものである。

○キノー アシコデ アンター イーヨッタ トーリノ コトガ オキテ モー ワカラン ヨノ。(昨日あそこ
で、あなた、言っていた通りのが起きて、もう、だめだね。 中男↓中女)

「アンター」は、長い表現では一文の中に、二度、三度となく出現していることがある。「アンター」が文の切れ目を示すのではないかというほどであることもある。また、「ノーアンター」という形を取って用いられていることも多い。山口県下に盛んな「ノンタ」の成立基盤に等しい発話心意を見てとることができるようである。

「アンター」を文中に間投する強い傾向は、大竹市阿多田島に見られる。阿多田島では、文末詞「ノー」の代わりに「アンタ」若しくは「ノーアンタ」を出現させている。熊野町は、それほどではないにしても、多用する地域の一つであるといえよう。

敬語の表現

(ア) 「ガンス」「アリマス」

あいさつ表現でも見られたように、「ガンス」は、老年層のいい態表現をしたてるものである。中年層以下では、

○エーヤンバイニ アリマス ノー。(よい塩梅(天気)ですなえ。 中男↓々)

のように、「アリマス」を用いている。賀茂郡の西条町では、時に、

○ケツコーニ アリヤンシタ。(とてもきれいでした。 老男↓々)

のように「ヤンス」を用いているが、熊野町では用いられない。

(イ) 「ツカーサル」

○アレニヤー キテ ツカーサツタンジャゲナ デ。(あれ／あの家／には、来て下さったのださうだよ。 老女↓中男)

熊野町では、「ツカーサル」は、補助動詞として用いられ、ラ行四段活用 of 語としてすべての活用形が使用されている。その命令形は、

○ツカーサイ ヤー。(下さいよ。 中女↓々)

のようである。ところで、「ツカーサイ」の短縮形である「ツカイ」「ツカー」も用いられている。短縮化し、更に音変化があるほどに粗略な物言いの表現とされているようである。

(ウ) 「ナサル」系敬語

「ナサル」系敬語のうち、改まった場席で用いられ、最も尊敬の気持ちを表わしている表現は、「ンサル」敬語を用いたものである。

○ナンカイモ キンサツツローガ マー ウチニモ ヨツツカーサイ ヤ。ノー。(何回も来なさったろうが、うち(わが家)にもお寄り下さいよ。 中男↓々)

この「ンサル」は、ラ行四段活用をし、その各活用形が用いられている。

次に、「ンヤイ」が認められる。

○キノー キンヤル トキニ ミンヤッタンジャゲナガ、ワカラン ヨノー。キンヤイ ヤ ユーチヨイタノ
ニノー。(昨日来なさる時に、見られたのだそうだが、だめだよねえ。来なさいよといっておいたのにねえ。 中女↓

中男)

この表現は、発話者のいこの行為について表現しているものである。「ンサイ」が改まった場席で用いられるといういかめしさをもっているのに対して、「ンヤイ」はいとこ程度の身内の者であるとか、日常よく知っている近隣の人であるとかに對して用いられるものである。身近な人に対する軽い敬意を表現するものであるだけに、日常ひじょうに多く用いられている。

熊野町の「ンヤル」は、ラ行四段活用の語として、各活用形が用いられている。使用年齢層は、中年層以上の

I 生活誌編

男女には、なお盛んであるといってよい。青年層では、もはや用いられなくなりつつある。

安芸地方で、「ンヤル」敬語が用いられている地域は、ほかにない。かつて、筆者は、大竹市木野で、

○アツチー イキンヤ。(あちらへ行きなさい。)

という言い方を老年層男子(一九六〇年で九十歳くらいの方)から、一度だけ聞いたことがある。この「ンヤ」は、恐らく「ンヤイ」の変じたものであろう。また、昭和二十五年上蒲刈島宮盛で、筆者は、古老の方から「ンヤイ」を昔は使っていたと聞いたこともある。「ンヤイ」は、安芸南部地域に、かつてはかなり盛んであったといえるものであろうか。いずれにしても、熊野町において、盛んに用いられていることは、特筆してよからう。

呉市一帯では、「ナサル」系敬語の「ナル」が、各活用形ともに盛んに用いられている。ところが、当地ではごく稀に、

○キナイ ヤ。(来なさいよ。)

のように用いられるにすぎない。「ナイ」の敬意の程度が「ンヤル」に近いと、用いられることが乏しいのであろうか。

「イス」「サイス」も、「ナサル」系敬語の語かと考えられる。

○アソコノ ジツチャンワ キノー ヒロシマイ イカイシタケー キョーワ コサイシャー ヘン ヨー

ノ。(あそこのおじいさんは、昨日広島へ行かれたから、今日は来られはしないよね。 中女↓中男)

「イス・サイス」は、「ンヤル」よりも、更に低い程度の敬意しか表わさない。そのためか、時としては揶揄の気持ちをもって用いられたりもする。こうなると、敬意は失われてしまっているということができよう。

なお、「来る」「行く」の意を表わす「ゴイス」は、「イス」の熟した語形であらうか。

○ホリヤ ゴイシタ ゴイシタ。(そら、おいでた、おいでた。 中男↓々) 〽老人の出かけてくるのを嘲笑して▽
「ゴイス」は、揶揄以下のものとして用いられているといつてよからう。

(エ) 「テジャ」敬語

○アスコイ オツテジャ ノー。(あそこにいらっしゃるよ。 中男↓々)

「テジャ」の形で、尊敬態敬語として用いられる。これには、各活用形に相当する形が認められる。それを見ると、次のようである。

未然形	連用形	終止形	連体形	假定形	命令形	将然形
テジャ (ナイ) チャー (ナイ)	テジャッ チャッ } (タ) テデ (中止形)	テジャ	テン (トキ)	テナラ	○	テジャロー

未然形は、「てナデナハ」という語連続から成立しているものである。「チャー」の形は、中年層以下の女性と青少年層に用いられることが多く、「テジャ」は中年層男性に用いられる。連用形の「テジャッ○」も同様に中年層男性に、「チャッ○」は中年層以下の女性と青少年層に用いられるものとなっている。

以上の「テジャ」の各活用形に相当する形を見ると、指定の助動詞「ジャ」の活用形と等しいことがわかる。広島市などで、未然形、連用形相当の形が、「チャー」「チャッ」となっているのに比べて熊野町の表現は、古態を保持しているということができよう。

なお、命令形相当の表現は、

○ハヨ イッテ₁。(早く行ってくださいよ。少女↓中女)

のように、「テ」の長呼形が用いられている。これは、「テ」によって中止的な表現をしたてているものではなく、「テ」を介して尊敬態表現をしたてているものであるため、「テジャ」敬語法の一つとしうるであろう。

「ジャ」の代わりに、ていねい態の「デス」を用いるものもある。

○ハ₁ コナ₁イダカラ キヨッテデスケー ノ₁。(もうこの前から、来続けておいでですからねえ。中男↓々)

「デス」によるていねいさは、一層増したものとなっている。「デス」の各活用形も、「テ」に下接して用いられるのは、「ジャ」の場合と同様である。

青年層以下では、「デデス」ではなく、「テンデス」の形を用いている。

(オ) 「デス」「マス」

一つの事象がそこに存するということを、ていねいに断定する言い方「コトデス」は「コッテス」となる。

○ホ₁ ユー コッテス。(そういうことです。老男↓中男)

また、将然形は、老年層では「デヒョ」の形で用いられる。青年層では、「デシ₁」のように、上昇調の形で用いられるのも特徴的である。

「マス」は、老年層でその未然形を「マヘン」といい、将然形を「マヒョ₁」といっている。また、仮定形は「マスリヤー」を使う人が多いが、中年層以下では「マシャー」を使っている。このことには、一段活用動詞、サ変動詞の仮定形の場合と同一の状況が認められる。

打消しの表現

「ン」が打消し表現に用いられるのは、関西以西の方言と同様である。ところが完了態の表現には、次のような形が用いられている。

○ノミヤ―セ₁ダッタ。(飲みはしなかった。老男↓々)

老年層では、この「ダッタ」の形が一般的である。芸北地方で、「ザッタ」の用いられるのに比べると、やや新しい形が用いられているといえようか。中年層では、「ナンダ」が用いられている。しかし、中年層の女子、青年層以下では、「ンカッタ」を用いることが多くなっている。

連用法に立つ形では、次のようなものが認められる。

○ソー ユワット…。(そう言わないで…。老女↓中男)

○ソー ユワント キンヤイ ヤノー。(そう言わないで、来なさいよねえ。中女↓々)

老年層では「ソット」が、中年層以下では「ソント」が用いられている。広島市などで「ソント」が用いられるのに影響されていることであろうか。

単純な打消し連用法ではなく、そのことを行わないままで、その事態が成立している意を表わすには、「ズニ」を用いる。ところが、中年層以上の人々には、時に、「ズクニ」を用いることがある。

○イワンズクニ コイ ヨ。(へ親に言わないで、来いよ。老男↓少男)

「ズクニ」は、備後地域に盛んである。西進したものかとも考えられる。

連用中止法では、「ソイデ」の形が用いられる。副助詞「モ」を伴って、

○セーデモ エー。(しなくてもよい。中女↓々)

のようにも用いられている。ところが、中年層以下の者には、「ソンデ」の形が用いられるようになり、青年層以下の者には、「ソンデ」の形が、ごく一般的とさえなっている。

条件法に立つものとして「ソニャー」が用いられる。老年層では、

I 生活誌編

○ハヨ モドラニャーノ。(早く戻らねばね。 老男↓少男)

このように、動詞未然形に「ニャー」が接している。ところが、中年層以下になると、

○イカンニャー ミエンヨ。(行かねば、見えないよ。 中女↓々)

のように「ン」の挿みこまれた形が、年が若いほどに多く用いられるようになっていく。広島市などでは、「ンニャー」の形が一般的であるのに比べて、熊野町は、やや古い形を保持しているといえるようである。

「ないだろう」の意を、「ナカルマー」という。

○ホー ユー コター ナカルマー オモウンデスデ。(そんなことはないだろうと思うのですよ。 中男↓々)

この「ナカルマー」は、二重否定の「なくてはなからう」の意味を表現するかのごとくに受けとられるものである。しかし、そうではなくて「ないだろう」の意を表わすものである。「マー」が、単なる推量のことばとして用いられるようになっていくといえなくもない。このような言い方は、熊野町を中心とする地域で盛んなようである。

推量の表現 「マー」は「ナカルマー」以外の場合には、打消し推量の表現として用いられる。「イクマー」(行くまい)のようである。

過去の推量には、「ツロー」が用いられる。

○モー カエツツロー。(もう帰ったろう。 中男↓々)

ところが、「ツロー」の仮定形「ツリャ」は、老年層において、ごく稀にしか用いられなくなっている。広島市では、「ツロー」「ツリャ」は用いられない。周辺の地域では、現在も盛んである。特に仮定形「ツリャ」は広島市より西の地域では、「ツリャ」のみならず、「ツラ」の形をも盛んに用いている。それに比べると、熊野町で

は、「ツリヤ」はほとんど用いられなくなり、「ツロー」の表現もかなり少なくなる傾向を見せている。

問いの表現

問いに「カ」を用い、やさしい問いに「ン（ノン）」を用いるのは、広島県下の一般的状況に等しい。ところで、疑問詞を含む表現においては、その文末が仮定形をとる表現がなされる。

○ナニユー シヨリヤ。 (何しているの。 老男↓少男)

これは、老年のやさしい問いかけである。

○ドシテ ワシガ イキヤ。 (どうして私が行くものかい。 中男↓々 憤怒)

これは、反問の表現をしているものである。問いから反問までの表現が用いられているのである。

○ドシタ ンナラ。 (どうした、え？ 中男↓々)

また時には、「ナライ」と「イ」の接した形も用いられる。「ナラ」は、断定の助動詞の仮定形に由来する文末詞である。

○ドコイ イクンナラ。 (どこへ行くのか。 中男↓々)

○ドコイ イキヤ。 (どこへ行くの。 中男↓中女)

この二つの表現のうち、前者は詰問の表現という気持が強い。後者は反問のものである。そのため、ともに男性専用の表現といつてよい。

疑問詞を含む表現の文末が仮定形で収束され、問いの表現をしたてるということは、岡山県以西の山陽地方において盛んである。その中にあって、安芸国地方は文末詞「ナラ」をも成立させているほどに多用されている地域である。熊野町も、その地域の一地である。

伝聞の表現

第三者の表現を、そのままの形で伝達する場合には、「ト」を用いる。

○ジブンデ イク トー。(自分で行く) って。 少男↓母)

引用を表わす格助詞が、伝聞の文末詞として用いられている。これに対して、第三者の発言を自分なりにとりまとめて、伝聞の形で表現するには「ゲナ」を用いる。

○ゲナゲナバ|ナシワ ウソ|ジャゲナ。(「ゲナゲナ」ということばのつく話は、嘘(話)だそうだ。)

この言いならわしは、「ゲナ」の用法の本質をよく物語っている。

助詞と表現

(ア) ト 抜け

関西以西、広島県地域までの山陽道側の地域は、格助詞「ト」を省いた表現が多いことで有名である。熊野町も、これまで挙げた例にも見られるように、「ト」抜けが一般的である。ところが、「ト」に代わる語が用いられることも多い。

○アー ユーテ イーヨッタ ヨ。(ああ、言っていたよ。 中男↓々)

「ユーテ イーヨッタ」には、「言う」が二度繰り返されている。

○クル ユテ ユータ|デ。(来ると言ったよ。 中女↓々)

下に「ユー」「ユータ」の位置する場合には、「ユテ」の形をとる傾向が強いように見うけられるが、「ソー|ジャ ユーテ ユー」。(そうだという。)のように、老年層男子が用いた例もある。両者の間には、明確な使いわけはないようである。

(イ) 「テカラ」「テカラニ」

○学校に キーテ|カラ カエッ|タ ヨ。(学校に尋ねた後で帰ったよ。 中女↓々)

この表現から、「学校に聞いて、帰った」と事がらの順序を示した表現といえる。とすれば、この「テカラ」の「カラ」は、そのこと、すなわち「聞いた」ということがそのことの起点となったという意味を表わしているものといえることになる。ところが、次のものはどうであろうか。

○アレガ アー ユー コトー ユーテカラ コマッタ ヨノ。(あれ(人)が、ああいうことを言ったので困ったよ。)

この場合は、そのことがあった後に困った事態が生じたという意味にもとれる。しかし、発言の主意は、「あんなことを言う」ということが原因になって、困った事態が成立したということにある。「カラ」は、「テカラ」の形をもって、次第に原因や理由を表わす用法を獲得しつつあるように見うけられる。

以上のような「テカラ」は、中国地方一般に広く用いられている。ところが、上掲の用例とした表現と同趣の表現に、「テカラ」ではなく「テカラニ」を用いることが認められるようになっていく。「テカラニ」の用いられる地域は、福山市から広島市に至る沿岸部を中心とする地域に多い。熊野町でも中年層以下の女性に用いられることが多いようである。

(ウ) 係助詞「カ」「ゾ」

一つのことを例としてあげる助詞として、「ヤナンカ」がある。

○アレヤナンカ スカン ノー。(あれなど、好かないねえ。 少男→女)

この末尾に見られる「カ」は、係助詞に由来するものであろう。これが、「何か」という語構成をもって助詞として用いられていることは、広島県下の方言の一つの特徴であろうか。

○ハー クル カシラン。(もう来るかしら。 中女→女)

I 生活誌編

東京語の「かしら」に相当するものである。しかし、東京語では文末詞として用いられているものが、上例のようになお係助詞風の用法をもっている。これも広島県下に広く認められるものである。

古老は、「ゾ」を次のように使う。

○ドコゾニ アロー。(どこかにあろう。 老男↓々)

時に中年男子でも用いられることがあるが、この場合には「ドコド」のように「ド」の形を用いていることが多い。「ドコゾ」の言い方は、中国地方に広く認められたものであったが、現在では、都市部から遠く離れた地域で、稀に聞かれるものとなってしまっている。熊野町の立地条件が都会化しつつあるとはいっても、なお農村性を強く残存している状況が、この表現のうえにも汲みとられる。

用言の各活用形のうちに、注目される事象のみを取り上げてみる。

用言の活用と表現

(ア) 動詞の仮定形、連用形ウ音便

一般動詞、カ変、サ変の動詞の仮定形は、世代によって変動しつつある。中年層以上の人々と青少年層の人々の用いる仮定形を表示すれば、次の表のとおりである。

広島市などでは、老年層においても熊野町の青少年層と同一の形をとりつつある。将来は熊野町においても、

共通語形		中年層以上	青・少年層
見れば	ミリヤ	ミリヤ	ミヤ
来れば	クリヤ	クリヤ	キヤ
為れば	スリヤ	スリヤ	シャ

広島市と同様に変化するかと思われる。

「飲んだ」を「ノーダ」、「遊んだ」を「アスーダ」、「書いた」を「カータ」、「差した」を「サータ」のように、中年層以上では、動詞四段活用 of 連用形の「テ(タ)」に続く形をいわゆるウ音便として表現するのがふつうである。これは、広島市などの都市部では、ほぼ用い

られなくなりつつある。

(イ) 形容詞

形容詞は、その語末が〔a〕で終る「アカー」の類が注目される。これは、「アイ」連母音が順行同化して成立している。そのほか、「ナルイ」（土地などが平らである。）のような〔E〕形容詞類がある。共通語の「悪い」は「ワリー」で〔E〕形容詞の形をとっている。「青い」は〔o〕形容詞類のものである。「トイ」（遠い）「カイ」（かゆい）は、〔E〕形容詞類である。「スズシー」などは「シー」形容詞と呼んでよからう。特殊な形容詞には「エー」（よい）がある。

以上の形容詞も、連用形はウ音便形をとり、「アコー」「ナルー」「ワリュー」「トュー」「スズシュー」の形をとっている。中国地方一般にウ音便形は現在も盛んである。熊野町もその一つである。

様態を示す「ソーナ」に接する形は、「アカカリソーナ」「スズシカリソーナ」のように、いわゆるカリ活用の形をもつて用いられる。少年層では、広島市などと同様に「アカソーナ」「スズシソーナ」の形を用いるようになっている。

また、仮定形も、中年層以上では、「アカカリヤ」「スズシカリヤ」の形を用いることが多い。これもカリ活用形のほうが盛んなわけである。少年層は、「アカケリヤ」「スズシケリヤ」を用いている。

(ウ) 形容動詞

形容動詞の仮定形は、少年層では広島市などと同様に「シズカナケリヤ」の形が用いられているが、中年層以上では、次のように、「シズカナリヤ」の形を用いている。

○シズカナリヤ エージャロー。（静かであればよいだろう。 中男↓中女）

I 生活誌編

連用形に「シズカニ」、終止形と連体形が「シズカナ」の形で用いられ、更に将然形で「シズカナロー テーノ」。静かだろうよねえ。中男↓タ」のように「シズカナロー」の形を用いているのを見ると、熊野町におけるナリ活用の盛んさをうかがうことができる。

慣用表現

(ア) 「ワカラン」

中国地方では、「いけない」を「イケン」という。熊野町では、制止の表現に、

○オッチャンニ ソガーナ コト ユーチャー ワカラン ド。(おじさんにそんなことを言っではいけないぞ。

中女↓少男)

のように、「ワカラン」を用いている。

「ワカラン」は、「いけない」の意味のみではなく、「だめだ」の意味にも用いられている。

○コガンシチエモ ワカランシ ドーシタラ エカロー カノーヤ。(こんなにしてもだめだし、どんなにしたらよいかねえ。中男↓タ)

この表現は、物入れに細かな物を整理して入れようとしたとき、どうしてもきちんとは入らない、そこで隣の人に助力を求めて発言しているものである。目前の事態が理解できないという意味の「ワカラン」ではないことがわかるであろう。

○ナンボ ヤッチャッチエモ ワカラン ヨノー。ホンニンガ ヤル キガ ナーンジャケー。(いくらしてやっても、だめだよねえ。本人がやる気がないのだから。中男↓中女)

この例は、だめだといいつつも、その物事が完成しない、できあがらないという内容をもって用いている。「ワカラン」の用法は「イケン」よりも、かなり広いものといえる。

また、物事がわからないの意味でも用いる。

○ヨイヨ ワカラン コト ユー。(全くわけのわからぬことを言う。 中女↓青女)

慣用表現として用いられるのは「ワカラン」の形のみで、他の形で用いられることはない。ところで、この慣用表現と同一のものを、筆者は広島市安佐北区三田町の老人から、また安佐南区沼田町の老人から、それぞれ例ずつをえている。これらの地域では、ごく稀にしか用いられないで、通常「イケン」を用いることが多いようである。ところが、熊野町では、「イケン」を用いることは少ないし、そのうえ意味の広がりも大きいため、日常多用される表現であるといつてよい。

「ワカラン」と同様な表現は、奥州地域一般に用いられている。福島県相馬地方では「ワガンネ」といって、制止の表現をしたり、駄目だという意味の表現をしたりしている。また、青森県でも制止の表現に「ワガンネ」を用いている。「ワカラン」の表現が慣用化して用いられるのは、日本語一般の傾向に合致しているといつてよいかもしれない。

(イ) 「タベレ」

○ソコノー タベレ。(そこのを持っていけ。 老男↓々)

「タベレ」は、こちらに持って来いの意味にも、こちらのものを向こうへ持って行けの意味にも用いる。老人層にのみ用いられるもので、通常には命令形のみが聞かれる。しかし、ただ一度だけであるが、古老から、

○タベツチ ミー。(持っていってみよ。)

の形を聞いたことがある。元来は、四段活用動詞の語であったのであろう。「タベレ」の語も古い言い方の一つといえようか。